

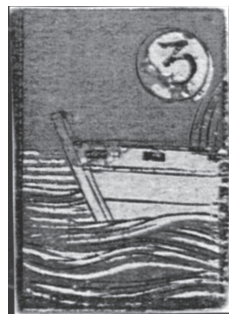
櫓櫓の立たぬ海もなし

【こんなとき】

- ・万事休す、お手上げだと思ったとき
- ・困難を乗り越えるための方策を探しているとき

- 【関連】方法のことわざ
- ・荒馬の轡は前から
 - ・三味線も弾き方
 - ・蹴る馬も乗り手次第

どんなに困難なことでも、何かしらの手だてはあるものだとのたとえ。櫓も櫓も船を動かす用具。櫓は船尾に取り付けて漕ぐもので、櫓は櫓より短く水を掻いて船を進める。「櫓は三年、櫓は三月」とのことわざもあるように、櫓は使い方が難しく習得に十倍もかかると思われる。それでも櫓や櫓があれば船は進められるから、広い海でも渡れるというもの。だが、それが無ければ図の「櫓櫓が無うては船で渡れん」ことになってしまい、取るべき方法のないお手上げ状態の意となる。図は明治時代の上方系いろはカルタにある珍しい一種のもの。



上方系いろはカルタより
「櫓櫓が無うては船で渡れん」

好きの道に辛勞なし

【こんなとき】

- ・自分の好きな道、興味の持てる道を進んでほしいと思ったとき

- 【関連】好きのことわざ
- ・好きこそものの上手なれ
 - ・好きは上手のはじまり
 - ・我が好きを人に振る舞う
(自分の好きを押し付ける)

好きでやっていることに苦勞はないということ。苦勞の一義的な意味は苦しみ疲れること。人はどんなことをやったとしても、長く続けてゆけば少々の辛い目にあうこともあるはず。しかし、それが、心底好きなものであれば、はた目からは苦勞に見えても本人は苦勞と思わない、というのがこのことわざ。例えば、冒険好きの人が極寒の地を旅すること、想像してみよう。厳しい気象や雪原での種々の危険などが待ち受ける苛酷な旅だから、実際には、苦勞のレベルを超えた苦難の連続の行路が想像される。でも、冒険が成功すれば乗り越えた苦難の大きさが、大きな歓びに転化し、達成感を味わうことができる。その感激の強さは体験した当人しか実感できないからだ。要は、自分のこれぞという好きな道を見つけ出すことだろう。